

# 3 宇太水分神社の祭礼行事に みる歴史的風致

## (1) はじめに

宇陀市の東南部に位置する菟田野は、四方を山に囲まれ、東西に流れる芳野川に沿って集落が点在する地域である。

菟田野は古代、菟田下<sup>うだのしもつあがた</sup> 県に属し、その中心があったと考えられている。古事記・日本書紀で舞台となった宇賀志をはじめ、古墳時代前期初頭の古墳群「見田・大沢古墳群<sup>25</sup>」を擁する歴史資源豊富な土地柄であるほか、古くから水銀の産地として認識されていた。

宇太水分神社は、芳野川と四郷川の合流点付近に位置し、背後には鎮守の杜と水銀鉱山跡がある。中世は興福寺の荘園となり、春日神社と深い結びつきを持っていたほか、鎌倉時代末期に後醍醐天皇の勅により本社が再興され、その社殿は修復を重ね現在まで受け継がれてきた。

この水分神社を中心とした祭礼行事は、中世から始まったとされ現在でも続けられている。また、神社の門前は在郷町として賑わい、近隣に暮らす人々の生活とともにあった。

芳野川と四郷川が合流する場所は、古くから水害が多く、被災と復旧を繰り返してきた。中でも昭和 34 年（1959）の伊勢湾台風では、菟田野地域のほぼ全域に被害が及んでいる。この影響で、昭和 37 年（1962）から神輿と大名行列形式のお渡りが休止に追い込まれ「御幣渡り」のみの秋祭りとなったが、平成 2 年（1990）の地方創生事業を契機に菟田野太鼓台保存会が結成され、本来の秋祭りの姿に戻すことができた。

令和 2 年（2020）、令和 3 年（2021）はコロナウイルス感染症の影響で、再び「御幣渡り」のみの形式による秋祭りの開催となったが、その間に太鼓台の修理等のメンテナンスを行い、次の秋祭りには出られる状態に整えている。

現在でも宇太水分神社の秋祭りに照準を合わせた暮らしは受け継がれている。

菟田野には「宇賀志」「菟田高城」「血原」など、『古事記』『日本書紀』に登場する地名がいくつも残り、古代から宮廷との関りが深い土地柄であったことが

<sup>25</sup> 見田・大沢古墳は、西日本各地で大型前方後円墳が造られるようになる古墳時代前期初頭の古墳群で、橿原考古学研究所発行の『宇陀 悠久のとき』には方形台状墓群とあり、1 号墳は前方後方墳状に張り出し部が突出した異例の形をしている。辰砂（水銀朱）生産との関係性についても注目される。宇陀市の古墳の発生時期を辿るうえで貴重。

うかがえる。その理由のひとつとして、<sup>あがた</sup>県<sup>26</sup>の設置がある。『日本書紀』、神武東征条によると八咫鳥に導かれた神武一行は、熊野から菟田<sup>うだのしもつあがた</sup>下<sup>うだのうかちのむら</sup> 県に達し、そこを菟田<sup>うだのうかちのむら</sup> 穿<sup>え</sup> 邑<sup>うかし</sup>と名付けたという。また神武は菟田<sup>うだのうかちのむら</sup> 県<sup>え</sup>の首領である兄<sup>え</sup> 狛<sup>うかし</sup>・弟<sup>おとうかし</sup> 狛<sup>え</sup>を召したが、兄<sup>え</sup> 狛<sup>うかし</sup>は従わなかった。弟<sup>おとうかし</sup> 狛<sup>え</sup>に菟田<sup>うだのうかちのむら</sup> 県<sup>え</sup>主として菟田<sup>うだのうかちのむら</sup> 邑<sup>え</sup>が与えられ、宇陀<sup>もひとり</sup>の水<sup>も</sup>取<sup>ひとり</sup>等の祖となった、と記される。宇陀<sup>もひとり</sup> 県<sup>も</sup>の首長であった宇陀<sup>もひとり</sup> 県<sup>も</sup>主が、のちには主<sup>も</sup> 水<sup>ひとり</sup> 部として王宮に水や氷を献上するようになった。

中世には、このあたり一帯は興福寺領となる。宇太水分神社のあった西殿荘は、春日社記録『中臣祐定記』によると、寛喜元年（1229）に春日若宮御節供料所として、その存在を確認することができる。

南北朝戦国期には南朝方を庇護した伊勢国司北畠氏のうしろ盾を受け、国人領主の沢・秋山・芳野・小川氏が台頭し、領地をめぐって私闘を繰り返していたが、のちに武力衝突を避け話し合いで処分を決めるため「宇陀郡内一揆」が組織された。4氏は、宇太水分神社の神水を飲み交わしてこれを守ったが、天文6年（1537）芳野春竹丸が沢氏に宛てた文書から、秋山氏が離反し、その実質を失ったことが伝えられている。領主は宇陀松山と同じ変遷を辿り、元禄8年（1695）より幕府の直轄地となった。

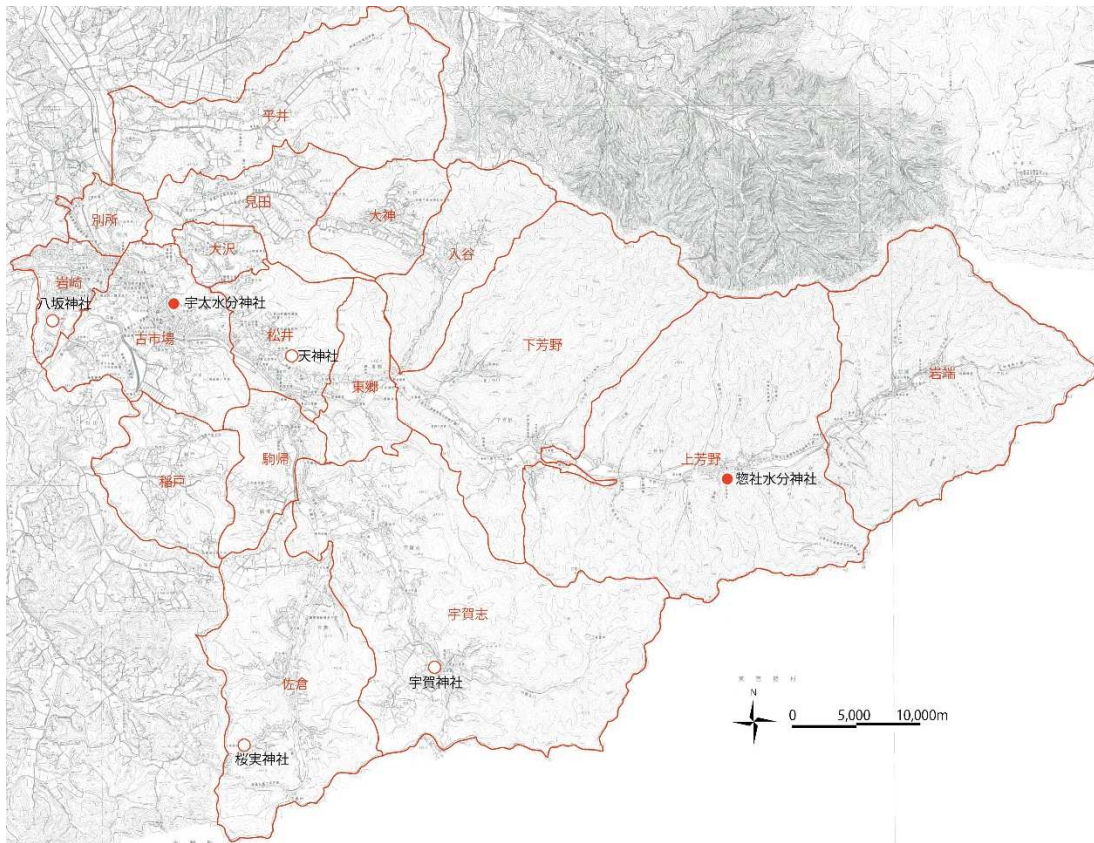
西殿荘の市は、熊野・伊勢・大和を結ぶ交通の要衝地で、古代・中世を通じて繁栄した。年号不詳の『沢氏古文書<sup>27</sup>』に、「うたの市」の記述があり、9日に市が立つことと、周辺の村人が集まり賑わっていたことがわかる。文禄4年（1595）の検地帳には既に「古市場」と記されており、このころには宇陀松山へ市が移ったとみてよい。そのごは古市場村周辺の在郷町となり、米や柿などの作物のほか、近隣の町の商人と株仲間を組織し、絞り油、藍染、煙草等の品々を扱っていた。薬草については、薬種問屋が多くいる松山町へ直接持ち込み、葛は花見客をあてこみ吉野へ売りに行っていた。

江戸中期以降、旱魃や自然災害により飢饉が続き、農村部では離村する者が多かった半面、町場的な発展を遂げつつあった古市場の人口が増加した。こうしたことから、古市場は近世以降も賑わいを見せていたことがわかる。

また、江戸末期から農閑期に行っていた毛皮革<sup>なめ</sup>の鞣しが、明治中期から盛んにおこなわれるようになり、主要産業となった。

<sup>26</sup> 県は、王権が設定した地方行政制度の単位で、畿内およびその周辺地域や吉備・筑紫などに分布している。王権が瀬戸内海ルートを中心に勢力を拡大していく過程に対応すると考えられるので、4世紀代から5世紀前半までにはほぼ設置されたとみられている。

<sup>27</sup> 東吉野と接する佐倉の「たふい山」を巡って、佐倉と谷尻で争論となり、沢氏が調停役を務めたことを示す古文書。損害を受けた佐倉から、等価の犠牲として谷尻惣庄の手による犯人の成敗を求めているが、これができなかった場合は、佐倉の者が明日のうたの市にて谷尻の人を無差別に襲う、と書かれている。



菟田野地域の地名と宇陀水分神社・惣社水分神社の位置

明治 22 年 (1889)、町村制の発布に伴い、近隣の村が合併<sup>28</sup>し「宇太村」「宇賀志村」が誕生する。昭和 31 年 (1956) に両村が合併し、菟田野町となった。

昭和 34 年 (1959) 伊勢湾台風により川が氾濫し、殆どの世帯が被災した。昭和 34 年 (1959) から昭和 37 年 (1962) にかけて災害復旧事業が行われ、川幅の拡張、護岸工事の徹底により景観が大きく変わった。また、昭和 37 年 (1962) を最後に、秋祭りの神輿渡御と大名行列形式のお渡りが休止され、御幣渡りの形式で続けられていた。

この状況に転機が訪れたのは平成 2 年 (1990)、「ふるさと創生事業」で各地方公共団体に交付された一億円の使途について協議した結果、6 項目の提言の中で「お渡りの復活」が盛り込まれ、神輿のレプリカ製作や衣装・道具の新調に活用された。こうして宇太水分神社秋祭りのお渡りは再開されることになった。

<sup>28</sup>古市場村、松井村、大神村、見田村、大沢村、別所村、平井村、岩崎村が合併し「宇太村」に、稲戸村、駒帰村、佐倉村、宇賀志村、岩端村、上芳野村、下芳野村、入谷村、東郷村が合併し、「宇賀志村」、となった。



古市場の町並み



ゆるやかに曲がる道

菟田野地域には、惣社水分神社と宇太水分神社が鎮座する。五穀豊穰を守護する農耕の神として信仰を集め、その名の通り水を司る神である。

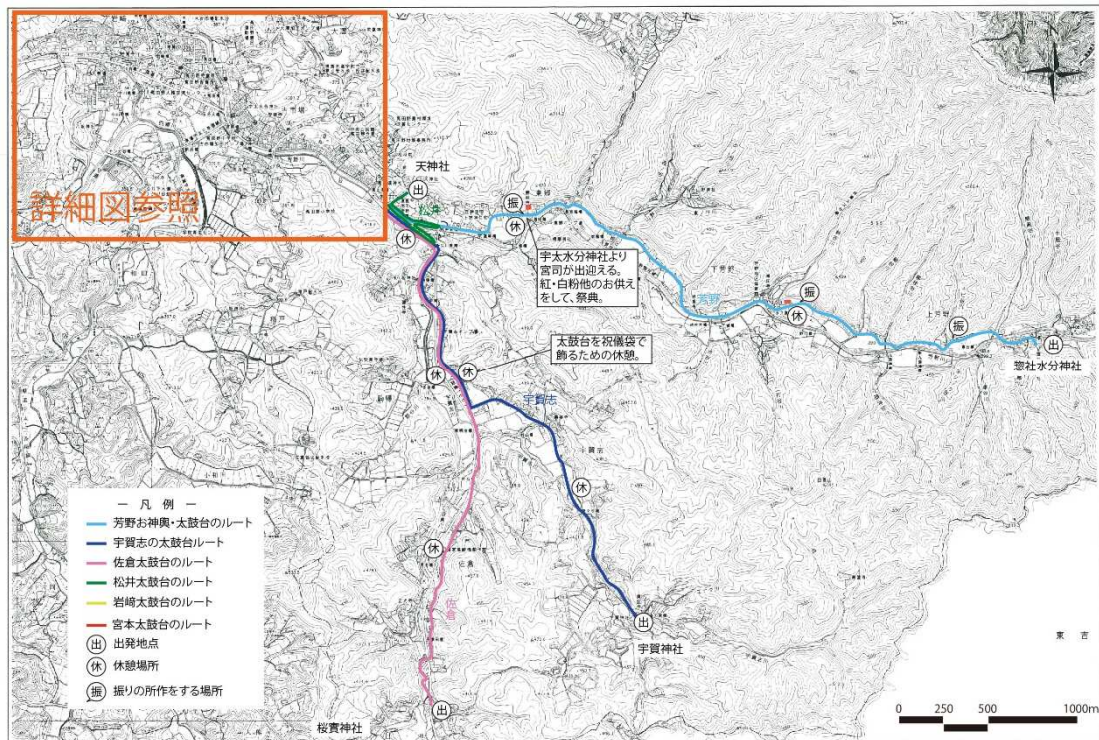
『延喜式』の「祈年祭」・「6月の月次」祝詞によると、稲を奉ることに関わらせて「水分に坐す皇神等の前に白さく、吉野・宇陀・都祁・葛城と」とあり、平安時代には既にあったと考えられている。

宇陀の水分神社は本来一社のはずであるが、宇陀郡内には水分神を祀る神社は10社ある（表2-1）。このうち、①②③は、宇陀の水分神社のうちでも中心的な神社で、芳野川の上流・中流・下流にそれぞれ鎮座している。特に①②の宇太水分神社は、平安後期には上宮・下宮として口宇陀全体に広がる社領を二分していた。③の惣社水分神社も芳野川上流にあって芳野氏の勢力拡大に伴いその影響力を強めた。④⑤の水分神社は、それぞれの地元では③から分祠されたと伝わるが、永禄3年（1560）『玉岡水分縁起』では、①から末社として勧請されたと記している。

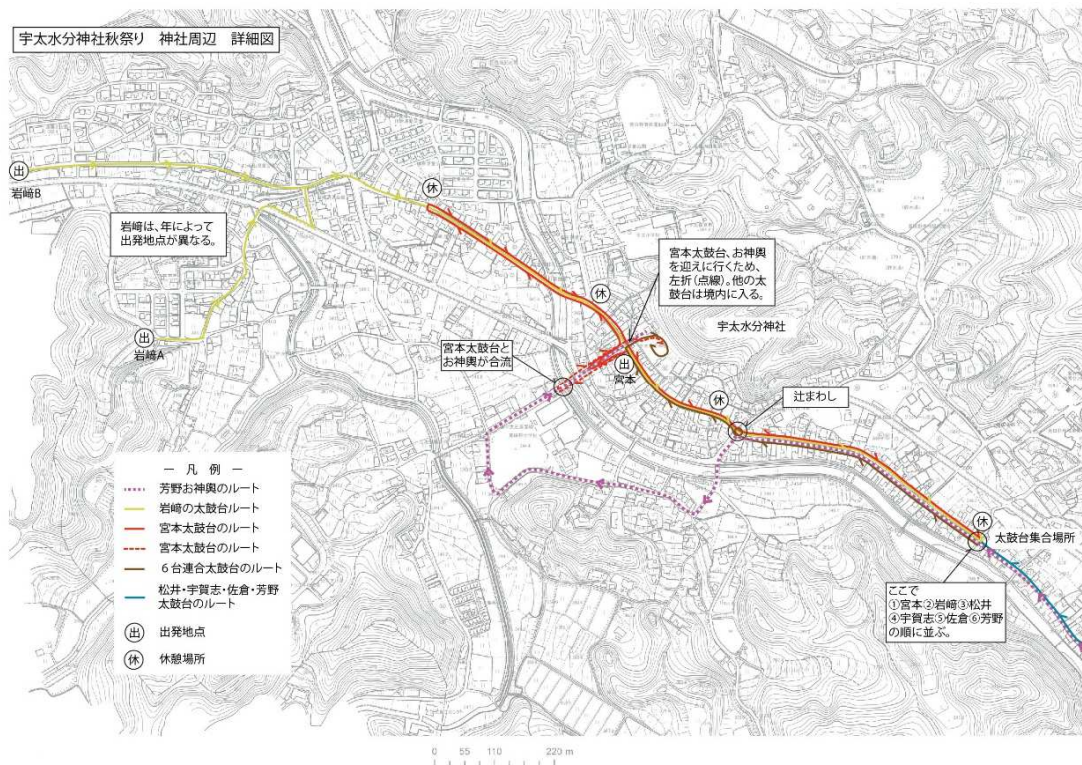
宇陀市内に分布する水分神社一覧

|   | 名称               | 場所                         |
|---|------------------|----------------------------|
| ① | 宇太水分神社           | 菟田野古市場字菟田野                 |
| ② | 宇太水分神社           | 榛原下井足字水分山                  |
| ③ | 惣社水分神社           | 菟田野上芳野字中山                  |
| ④ | 水分神社             | 大字陀平尾字宮ノ谷                  |
| ⑤ | 水分神社             | 室生下田口字田口西                  |
| ⑥ | 春日神社<br>(旧名水分神社) | 菟田野美田字水分                   |
| ⑦ | 平尾神社<br>(平尾水分神社) | 大字陀東平尾字宮野谷                 |
| ⑧ | 水分神社             | 大字陀迫間字子守<br>(明治41年阿紀神社に合祀) |
| ⑨ | 御井神社             | 榛原檜牧字高取<br>(祭神四柱註に水分神あり)   |
| ⑩ | 阿蘇神社             | 菟田野平井字阿蘇<br>(祭神四柱註に水分神あり)  |

菟田野の秋祭りは、旧暦 9 月 21 日に実施していたが、現在は月遅れの 10 月 21 日に最も近い日曜日に開催される。③惣社水分神社の女神様が、①宇太水分神社の男神様のところへお渡りをする行事で、このときに芳野川流域の郷社役員も一同に会する場になっている。この行事の中核をなす、惣社水分神社から宇太水分神社へのお渡りの行事と、芳野、宮本（古市場）、岩崎、宇賀志、佐倉、松井の太鼓台巡行の行事について紹介する。



宇太水分神社秋祭りに集まる太鼓台のルート



詳細図

## (2) 建造物

### 【宇太水分神社本殿】国宝

木造、一間社隅木入春日造、檜皮葺、棟木銘より元応2年(1320)創建)。三棟の社殿が並び、屋根が一体化した形が珍しい。外部は彩色が施され、細部彫刻は精巧につくられている。

毎年、五穀豊穰を感謝し、秋の例大祭でこの神社境内に神輿と太鼓台が集まり、豪壮な引き回しが披露される。



宇太水分神社本殿



末社春日神社本殿

### 【宇太水分神社末社春日神社本殿】重要文化財

木造、一間社隅木入春日造、檜皮葺。本殿と同様に彩色と彫刻が施されている。建立の時期は不詳だが室町中期の建立と推定される。本殿の隣に鎮座し正面に神門を置く。本殿・宗像神社とともに瑞垣で囲まれている。

【宇太水分神社末社宗像神社本殿】重要文化財

木造、一間社流造、檜皮葺。建立時期は不詳だが室町末期の建立と推定される。本殿と同様に彩色と彫刻が施されている。春日神社本殿同様、正面に神門を設け本殿とともに瑞垣に囲まれている。



末社宗像神社本殿

【惣社水分神社本殿】

木造、三間社流造、銅板葺。菟田野の東に位置し、小高い丘の上に社殿がある。『大和国神社明細帳』(奈良県庁文書/明治12年(1879))では「本殿の規模は桁行壱間貳尺五寸、梁行壱間貳尺」とある。現存する建物と同じ規模で柱等の部材が相応に古いことから、このころには既にあったと推察される。秋祭りにはここから神輿と太鼓台が発し、古市場の宇太水分神社を目指す。



惣社水分神社本殿

【藤村家住宅】

木造、平屋建、大和棟造、茅葺一部棧瓦葺。惣社水分神社から古市場へ向かう道中で最初の休憩所となる。『菟田野町史』(昭和43年(1968))/菟田野町史編集委員会に写真が掲載されており、屋根をトタンで覆うなどの変化はあるが現在と同じ姿で写っており、柱等の部材が相応に古いことから、少なくともそれ以前の建物と推察される。



藤村家住宅



昭和43年(1968)当時の藤村家住宅

【勝林寺本堂】

木造方三間庇付仏堂、入母屋造、棧瓦葺。東郷にある古刹で、お渡りのときにこの寺院の前で祭典が行われる。紅と白粉が供えられ、ここで女神様はお化粧直しをされている。昭和34年(1959)の伊勢湾台風の被災状況を示す写真に鼓楼と本堂が現在と同じ姿で写っており、柱等の部材が相応に古いことから、少なくともそれ以前の建物と推察される。



現在の勝林寺



昭和34年(1959)当時の写真

<sup>こめたに</sup>  
【米谷家住宅】

木造一部三階建、入母屋造、棧瓦葺。複雑な屋根の形をしており、主屋は中塗り土仕上げ。もとは造り酒屋で、敷地内にいくつも蔵がある。現在は住宅。

大宇陀町が昭和 46 年（1971）に撮影した航空写真に現在と同じ状況の屋敷配置で写っており、このころには建てられていたことがわかる。太鼓台巡行のときにこの家の前が休憩所になっている。



米谷家住宅



大宇陀町が撮影した昭和 46 年（1971）航空写真

【桜実神社本殿】

2-1（2）建造物を参照。

【宇賀神社灯籠】

宇賀神社は、菟田野地域の南東に位置し宇賀志の集落の中央、宇賀志川沿いの僅かな平坦地にある。

『大和國宇陀郡神社明細帳』（奈良県庁文書/明治 12 年（1879）、追記あり）によると「村社、由緒不詳、祭神は茅宇迦斯神魂」とある。

本殿は一間社春日造、銅板葺で、境内の一番奥に鎮座している。拝殿は桁行三間、梁間二間の切妻造銅板葺で境内の中央に配置されている。本殿の手前にある石灯籠の側面に天保十五甲辰年（1844）と刻まれている。



宇賀神社石灯籠

鳥居の軸線上に拝殿、その奥に本殿が配され、南側に太鼓台を格納する倉庫と社務所がある。境内の北側には、役小角の石像や山の神、子もうけ石が置かれている。

【八坂神社灯籠】

八坂神社は、菟田野地域の西、岩崎にある。『大和國宇陀郡神社明細帳』（奈良県庁文書/明治 12 年（1879）、追記あり）によると「村社、由緒不詳、祭神は須佐之男命」とある。

八坂神社は、集落の南西の丘に位置し、中腹に設け



八坂神社石灯籠

られた鳥居をくぐり石段を登ると広場に出て、その先に拝殿、拝殿の奥に本殿がある。

本殿は木造一間社春日造、銅板葺きで、境内の奥で一段高い場所に建っている。本殿・拝殿が造営された年代は不明だが、拝殿脇の石灯籠は笠が入母屋造で、宝珠がない。側面に昭和8年（1933）7月建立と刻まれているほか、狛犬の台座にも昭和8年（1933）と刻まれおり（狛犬本体は後世のもの）この時期に大規模な造営があったことが伺える。秋祭りでは麓が太鼓台巡行の出発点になる。

#### 【辻村家住宅】

木造二階建、片側入母屋造、銅板葺。大正12年（1923）（市課税台帳による）に建てており、内科医院兼住居として使われていた。

この建物の背後に辻村病院ができ、現在は辻村家の専用住居となっている。秋祭のお渡りや太鼓台巡行の一行は、この建物の前を通過する。



辻村家住宅

### （3）活動

#### 【半夏生祭<sup>はげっしょさい</sup>】

惣社水分神社では7月2日、半夏生祭が行われる。このとき、宇太水分神社の宮司と氏子役員が惣社水分神社を訪ね、惣社水分神社の半夏生祭の祭典が終わったあとに社務所へ上がり、惣社水分神社の役員の顔合わせと、秋祭り開催の打診をする。惣社水分神社側は、打診を受けて月末までに宇太水分神社へ訪れて、受諾の挨拶を行う。これを受けて9月下旬より、打合せや所作の練習等、秋祭りの準備に入る。



半夏生祭の後、両神社の役員が顔を合わせる

#### 【例大祭】

例大祭は、10月21日に近い日曜日に開催される。祭の前日、郷社（惣社水分神社、東郷、入谷、駒帰、佐倉、稲戸、ほか）で宵宮の祭典と御供まきがあり、唯一宵宮をしない宇太社では当日の準備を行う。一方で、惣社水分神社でも花籠づくりや衣装合わせなどの準備が進められる。

この祭りで特徴的なものは「大名行列」と「御幣渡り」で、「大名行列」は現在、先導一小櫛13人一小鉾一立傘一台傘一弓2人一鉄砲2人一薙刀一赤槍一次

槍一黒塗御幣一白塗御幣 3 人一拍子木一手振 2 人一  
 先箱（挟箱）<sup>はさみばこ</sup> 2 人一槍振 11 人一槍振警護 2 人一花  
 籠 4 人一花籠警護 2 人一大鉦一獅子頭 2 人一太鼓打  
 2 人・太鼓持ち 2 人一で構成され、拍子木の合図で  
 それぞれ順に振りが行われる（右写真）。『総社水分  
 神社縁起 下書』（慶長 2 年（1579）/惣社水分神社  
 所蔵）によると当時のお渡りの行列は、「長柄十一筋  
 一花籠一鼻高鉦一面二枚一櫛十本一御幣二本一鹿頭  
 一太鼓一神輿・善綱一祢宜（騎乗）一乗尻七騎（芳  
 野四騎、駒帰・佐倉・松井各一騎）」とあり、槍 11  
 本は中世からの伝統であることがわかる。

右写真のように、砂を盛った場所で所作をしながら  
 「振り」（手振りはゆっくり左足を出しながら左  
 手を伸ばし肩の高さに上げたのち片足立ちとなり、  
 右足を出しながら左手を額の前にかざす動きを繰り返す。  
 うしろに続く鉦箱 2 人は箱を揺らしながら大きく左右に動き、  
 さらに続く槍振りは手振りの動きにあわせて左右に動きながら毛槍を上下させる）  
 を行い、旧道を進み、4 箇所のお旅所で祭典と休憩を  
 繰り返し、宇太水分神社を目指す。

本祭当日、朝 8 時から惣社水分神社神輿前で出発  
 祭があり、そのあとお渡りが始まる。惣社から宇太  
 社までの約 6km の道のりを、宇太社へ到着するま  
 でに「お旅所」を含む特定の場所で道中 9 回の「振  
 り」があり、これを見るため見物客が沿道に集まる。  
 「お旅所」は旧家の前や寺の前に設けられている。

一方、宇太社では 10 時頃から祭典が行われる。  
 午後からお渡し一行の接待をするため、早めに祭  
 典をする。

10 時 40 分頃、お渡りの一行が東郷の勝林寺前  
 のお旅所に到着する。この場所は旧宇賀志村の西境で、  
 宇太社までの中間地点である。ここで宇太社と郷  
 社の氏子が惣社のお渡し一行を出迎える。

神輿は旧道への入口に置かれ、神饌が神輿の前に



上芳野 鳥居垣内で二度目の振り  
祭典はなし



手振、先箱、槍振りと続く



旧道を歩く



お旅所での祭典



最初のお旅所、藤村家

並べられる。ここで一行は食事を取りしばらく休憩となる。

11時10分頃、準備が整うと、宇太社宮司を先頭に古市場垣内長・郷社の代表が列をなして大宿所を出て、お旅所に向かう。一行が神輿前に到着し整列すると、祭典が始まる。

まず、宇太社宮司から惣社宮司へ、<sup>べにこ</sup>紅粉と<sup>おしろい</sup>白粉の特殊神饌が手渡される。惣社宮司はそれを檜扇で受け、神輿前へ供える。現在は市販の化粧道具（口紅、白粉、筆、栗袋）を白紙で包み、麻紐で縛ったものである。これは、古市場は男神、芳野は女神であり、女神が東郷で化粧直しをするため、男神から供えられるものと伝わる。

祭典はそのあと、二人の宮司による祝詞奏上・出迎えの一行の拝礼・撒饌で終了する。そして、振りが行われたのち、宇太社宮司を先頭に、古市場の垣内長と御幣を持った郷社の代表が先供、惣社一行が後供となって出発する。

お渡り一行は、大宿所前から新道へ出て芳野川沿いを西に進み、松井橋の交差点を直進して旧市街地に入る。すぐ先に三つ辻があり、そこにすべての太鼓台が集合すると、太鼓台は岩崎・古市場・松井・宇賀志・佐倉・芳野の順で旧市街地を古市場方向へゆっくりと進んでいく。お渡りの一行はそのあとに続く。

12時ごろ、お渡りの一行が天神社前のお旅所に到着すると神輿の前で祭典が行われる。修祓、献饌、祝詞奏上、玉串奉納、撒饌の流れで祭典が終わると、振りをを行い出発する。

古市場の地蔵の辻の交差点にさしかかると、太鼓台は辻まわしをしたあと直進して旧市街地経由で宇太社に向かい、到着すると順次境内で引き回される。

一方、お渡りの一行は地蔵の辻から南に曲がって芳野川を渡り、菟田野中学校の角から宇太社の正面



化粧道具の特殊神饌を手渡す



ここでも振りが行われる



辻まわし



太鼓台の宮入り

にまわる。宮前橋の手前で郷総代らの出迎えを受け、宮前橋の側にある鳥居の脇で待機する。

次々と太鼓台が境内で引き回されるなか、最後に古市場の旧市街地を進んできた芳野の太鼓台は宇太社前からお渡り一行が待機しているところまで進み、お渡り一行を先導しつつ境内に入り、引き回される。

13時30分頃、お渡り一行が宇太社に到着する。振りをを行い境内に入場する際、花籠役が花籠の先端に繰りつけられた紙袋を竹の棒で破り、中の切り紙を撒き散らして境内を祓う。

拝殿脇の神輿を安置する場所でもう一度振りをを行い、神輿はいったん拝殿の中に入れられ、宇太社宮司の拝礼を受けると拝殿裏から運び出されて夫婦杉の前に安置される。

祭典は宇太社本殿前と神輿前とで別々かつ同時に行われる。まず、芳野・宇賀志など各郷社の役員が持参した御幣が、古市場の垣内長の手渡しにより本殿の中央殿へ上げられ、扉の両脇に立てかけられる。惣社の神輿前には、立札、大榊、白幣、金幣が立てかけられ、獅子頭が唐櫃から出されて安置され宇太社からの神饌が備えられる。

次に、宇太社宮司は本殿前で、惣社宮司は神輿前で同時に祝詞を奏上する。祝詞が終わると惣社宮司は宇太社本殿に、宇太社宮司は神輿前に移動し、再び祝詞を奏上する。祭典は14時過ぎに終了し、惣社、宇太社はそれぞれ直会となる。

14時30分頃、還御が始まる。直会を終えた郷社の代表は宇太社本殿から御幣を下ろしてもらい持ち帰る。芳野の太鼓台が最後の引き回しをして境内を出ると、それに続いてお渡りの一行も拝殿前で最後の振りをを行い、境内をでる。

太鼓台とお渡りの一行は、旧市街地を通り地蔵の辻の交差点で解散となり、惣社に帰る。

なお、令和2年(2020)から令和4年(2022)まで、コロナ禍のため秋の例大祭では御幣渡りのみ実施し、太鼓台巡行は令和5年(2023)に再開した。



花籠の切り紙を散らす



夫婦杉の前での祭典（令和2年（2020）撮影のため、芳野水分神社の御幣のみで神輿はない）



御幣を本殿へ上げる（令和2年（2020）撮影）



祭典の様子（令和2年（2020）撮影）

### 【太鼓台巡行】

芳野から神輿と太鼓台が宇太社へ向かっている間、宮本（古市場）、岩崎、松井、宇賀志、佐倉もそれぞれ宇太社を目指す。乗り子（太鼓台に乗り、太鼓を叩く子供のこと。原則、数え年で11歳の子供が乗り子になる。）を乗せて太鼓を叩きながら、進んでいく。尚、乗り子はこの日は神を宿しており、地面に足をつけてはならない、とされているため休憩中は保護者等が肩車をして世話をする。各太鼓台のルートは、104頁から105頁の図のとおりである。

宮本（古市場）は宇太社を出発し、鳥居の下で万歳をしたあと、岩崎の太鼓台を迎えに行く。佐倉は旧宇賀志小学校付近で宇賀志の太鼓台と合流、松井で宮本、岩崎、松井の太鼓台とさらに合流して隊列を整え宮入をする。

旧街道を進み、地蔵ヶ辻に出たときに、辻で太鼓台を引き回す。この地点で神輿のみ川を渡り、中学校前の橋あたり、かつての一の鳥居付近まで進んで宮本の太鼓台が迎えに来るのを待つ。太鼓台が先に境内に入り、入った順に境内前で引き回しをして、休憩しながら神輿が入場する瞬間を見守る。祭典が終わると、順次、郷社に向かい、乗り子を出した家で、それぞれ直会をする。



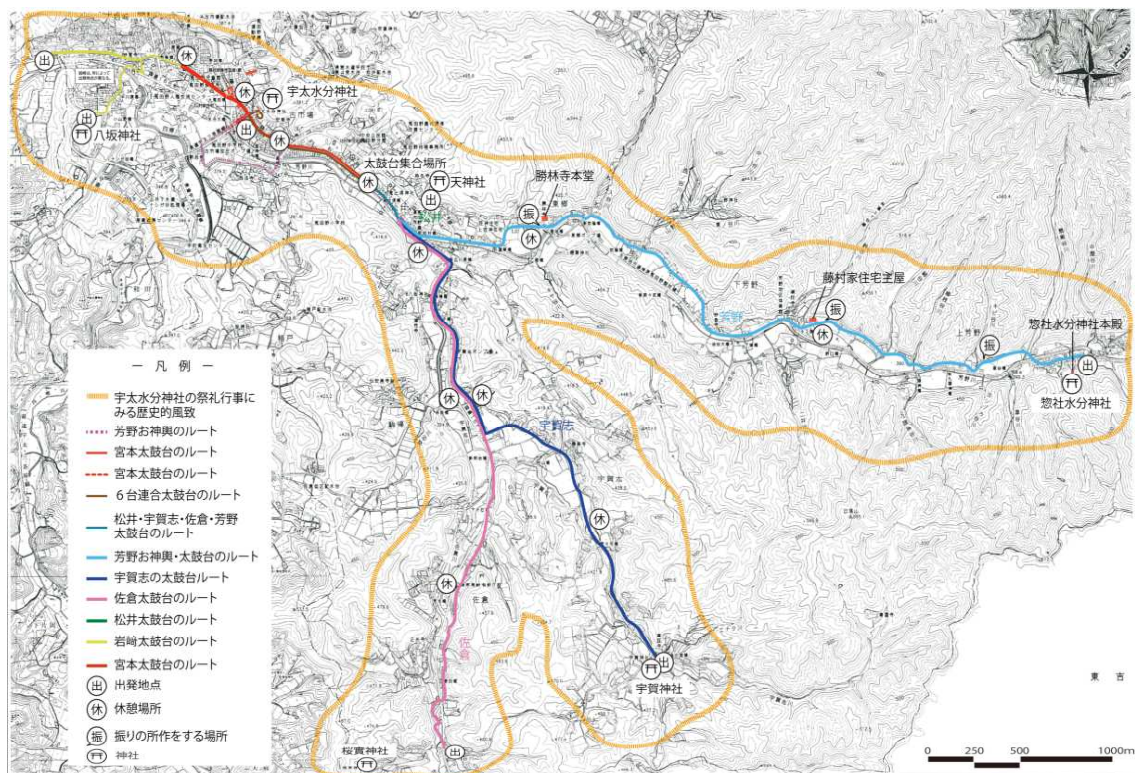
境内での太鼓台引き回し



境内にて休憩、昼食

## （４）おわりに

惣社の女神と宇太社の男神の年に1度のお渡りを、菟田野地域の人々はとても大切に暮らしている。この秋祭りのルーツを辿れば中世まで遡るが、そのころと大差ない隊列・所作が現在まで受け継がれている点からも、伝統行事を大切にしようという意図を読み取ることができる。こうした活動が、歴史的建物が建ち並ぶ農村集落や旧街道を舞台に繰り広げられており、良好な歴史的風致を形成している。



宇太水分神社の祭礼行事にみる歴史的風致の図

## コラム2 伊勢湾台風からの復興

昭和34年（1959）9月26日、折からの台風接近に伴って芳野川が増水、町内各所で溢水、死傷者60名、全流出20戸、半壊101戸、床上浸水437戸の被害を受けた。罹災者の数は7,148人に上り、殆どの方が何らかの被害に遭ったとみられる（昭和31年（1956）合併時の人口7,053人）。そのあと、5か年に及び復旧事業に取り組んだ。

昭和37年を最後に、神輿渡御と大名行列形式のお渡りは休止され、御幣をもって神社へ集まる方式に変えられていたが、平成2年（1990）のふるさと創生事業で保存会を組織し、重要文化財に指定された神輿のレプリカ作成と衣装道具一式を詠え、お渡りを再開させた。



伊勢湾台風の被災状況 東郷、瓦礫をよけて稲刈り



河川拡幅工事の風景（年代不詳）



河川改修事業の際に植えられた桜並木、みくまり桜と呼ばれ親しまれる